武家故實稽古日録筆授

一名花紅葉之巻

上

弓

内閣文庫

番號	和 28219
冊數	2 (1)
函號	153 321

153-321

万葉考之一の巻

天つちのはしめより有しことはそ

それのみ歌とてこのわさをしてふも

まこし人形度そしはと思しきこえふ

辭書きなのまふことのはくさ々にしたかひえ

石樹書にこえ句のれ連しことしのはちされは

よし人よあこときめ字をめてあし

見ちれきてよ形えそらとはくさく

形うりてとふ文為国ことと力く

とのとち何ゆさ字に家支服宗

の大人至りのきへの家江よ形え字

図書局文庫
日本政府図書
明治十五年購求
内閣文庫

伊勢流家はつたへありしこの比まで相続と
をききし親より伝へ来りし家のみちを
すてはこそ帰しくそこりし紫めて
底とりの色をまさらぬおのおの相つく字
おもて式はくみの人々つたへられしこそ其
先祖のひとりつ家にたて雑のよくこそか
くいかはさね中村のくつても孫おもの年ふた
年月を子々孫々とこその書とも之
しきこそけしめ家あくはしたかき式ある
ふ可帰さられハよれの年つきれりとめ書
しおきえくくすり至めてしま像このきし家

すゝ流とへてこそや源らまことおもしろき
このみ給ひて相まさりるんの家の文箱
武家の字母のもとら称の各ることわり
以ても是をさしよ文ありきこそあり雑年
ありこれかゝ字家の家とも各つゝ尾
まこともしく相くそとこさて中にもよ
ちのちも相の家れ比をかたこ字
流しまへて月流書流あしとそ
のゝこる汁家相家ともめ続すゝめやハ
帰こ流名流し其によりてこそ
人もたぬりうちとや又へつる也

嘉永二年二月窪田之形[illegible]の清書

花のちるをしきにも紅葉のあはれ深さよ心のう
つろひゆくはあはれにて世の人の風にしたかひけり
されは家隆ともいはれつゝ敬書とぞ
かれん人も紅葉なとめつる心ありしものを
其業は家隆定家にもおとらぬ心も出よし
と玉ひしけ二つの巻は名をあらはせる

なるべし 柳おもしろく正勝の孫なる倫東
の伊勢家の先哲よりうけし教なりなん
ありつるゞ事しげくして宗と極まる
祖父勝興の孫又伊勢安斎先生及心斎
の先生より宗と得しより父大人其業を得
ありけるも又父大人より其統をつぎぬ父大人
つゝしみつゝ勝体よく其所の代々を

得るまで四嗣をたわめ筆を継へばおよそも
なるまゝに集もありしく其業とまで遊ばず
其手のみならん事をこそよりのいとまもなく
安家に家んありけれど今傳なる書きの中
よりあたらちよよりありとく簡條目録の数々
など家書集めてよなど今をあるおのれ勝体
おもむきとこゝし書きの中よりえらんとし出せる

右書つゝね此二巻ハあたらぬあたらかしの
花のかをしやあをうつくしの紅葉の色也

弘化四年丁未十一月廿日　飯島與作源勝休撰

稽古目録
使者　拳者之部

一 状請取渡事
一 使者刀馬代目録請取渡事
一 太刀并請取渡事
一 脇刀請取渡事
一 弓請取渡事
一 鑓請取渡事
一 腹巻請取渡事
一 鞍請取渡事
一 志ゝけ鞍受取渡事
一 書請取渡事
一 鞭請取渡事

一 状箱請取渡事
一 東太刀生馬目録請取渡事
一 主人太刀目録使者にて太刀并請取渡事
一 歩刀請取渡事
一 空穂受取渡事
一 鎧請取渡事
一 冑請取渡事
一 鐙請取渡事
一 志ぞりぬく請取渡事
一 志ゝけ書受取渡事
一 矢羽請取渡事

一 行縢請取渡事
一 小袖請取渡事
一 上下請取渡事
一 馬請取渡同引物之事
一 太刀と平刀両請取渡事
一 太刀と馬同請取渡事
一 太刀と具足請取渡事
一 志太刀と目録状共請取渡事
一 太刀と鐙請取渡事
一 小袖と太刀請取渡事
一 弓と空穂請取渡事
一 鎧冑請取渡事
一 太刀目録弓請取渡事

一 弦桶請取渡事
一 小袖広蓋入請取渡事
一 鷹請取渡事
一 太刀二振請取渡事
一 太刀と腰刀請取渡事
一 太刀と弓請取渡事
一 使太刀と状請取渡事
一 鞍と太刀請取渡事
一 太刀と矢羽請取渡事
一 弓と箙請取渡事
一 弓と矢筒請取渡事
一 鞍と鐙請取渡事
一 太刀目録弓状共請取渡事

一 太刀と冑請取渡事

以上五十ヶ條

軍陣礼事

一 大将出陣祝并献
一 凱陣祝并献事 加賀之
一 大将首掛御目事
一 侍大将以下首懸御目事
一 陣中状請取渡事
一 軍中馬請取渡事

以上十二ヶ條

一 稽古目録

取扱 拝領之部 押之巻

一 七献之引出物之事

一 太刀進上之請取渡事
一 同陪膳酌事
一 同陪膳酌事 同上
一 大将首見物事
一 首桶請取渡事
一 同太刀目録請取渡事
一 同馬懸御目事 二局
一 太刀目録自分持参礼を申事

一 太刀を貴人へ献御目事
一 太刀目録持参御目事
一 猿楽ニ太刀出事
一 刀人ニ出候之事 口伝
一 扇ノ太刀目録広蓋ニ置出事
一 刀刀之事
一 鞠ニ真扇添出事
一 箙之羽広蓋ニ居出事
一 沓ノ縢一足ニ包事
一 進長刀請取渡事
一 小袖広蓋ニ積披露事
一 小袖ニ太刀扇添出事
一 牽馬引候之事

一 貴人ヘ參會之時御酒出太刀之次
一 御成之時亭主御釼献上之時持参之次
一 料足請取渡事
一 打紙請取渡事
一 脇差人ニ出事
一 皆具ニ付物鞍人ニ出之次
一 矢斗請取渡事
一 弓付請取渡事
一 鞍鐙一足ニ包事
一 書状広蓋ニ居請取渡事
一 猿楽ヘ小袖出事
一 扇ノ檀紙添出事
一 莚渡受取渡事

一 緞子金襴之入寸等参物受取渡之次
一 板物請取渡之次
一 弓矢一腰ニ渡事
一 精進肴台披露事
一 肴広蓋ニ居披露事
一 矢板ニ乗出候事
一 御帯参候事
一 祝料紙持参事
一 懐中之刀之事
一 御小袖拝領之事
一 出陣之門出物之事
以上五拾ヶ條
稽古目録

一 太刀小袖緞子参物請取渡事
一 広蓋ニ太刀参物居出事
一 少将披露事
一 瓶子ニ肴添出事
一 肴広蓋ニ居披露事
一 巻数披露事
一 伊勢御祓撲ニ麿斗地披露事
一 所ノ氷不出候之事
一 主君ヘ太刀折紙之順事
一 折紙拝領之事
一 主君人ニ刀被下時持出候之事

陪膳勤盃之部
御銚子　三方居　傍用意之右
御土器盃
二膳
御汁
引さい　白木の引足ニ居え候て前よ　御亭主引く　椀のふたをとる
通盃出居
汁再進
又通盃出居
汁再進
又通盃出居
銚子出　今度くんなべ用之　一盃ツギ　てうしのみ

薄茶　台ニ居
本膳　御手のもの　膳足打ち添
三膳
焼物
飯再進
飯継出居　飯継ニのもの
又飯継出ス　飯継ニのもの
又飯継出居
飯再進
盃　八寸ニ居　向膳ニ置
引肴　白木の台ニ居　右の方より亭主引く　椀のふたをとる

銚子出　くんなべあり　一盃ツギテ　てうし入
土器盃　三方ニ居　前の盃ニ重ね置
銚子出　くんなべニ又土器挽の肴も二盃ツギ　三盃目ハ入てうし又亭主大の肴　まわり進
土器引
湯出　并水
三の膳引
本膳引
濃茶　御ゆくさニ居
薄茶の菓子　前の菓子と引替
烟草盆
茶わん引
以上四拾六箇條
式三献

吸物　二の膳向の膳ニ又へ置く
取肴　まるめの取肴ニ盛三方ニ居　御土器と引く二の膳向ニ居
銚子入　土器と共へ入
取肴引
吸物引
二の膳引
菓子　吸物菓子ともに八寸ニ居　本膳と引替
茶わん引
薄茶　台ニ居
菓子引
御たばこ盆引

引渡
勝負
挽
挽入
打身引　以上拾箇條

一 以通弟子勝之式之事
一 盃之式之事　以通之式一服之夫人の勝の通と云
一 湯之式之事
一 提子取渡事
一 銚子提子持之事
一 婚禮諸式之事

打成
銚子　三々九度之事　加之　提出居升
銚子入
勝負引
引渡引

一 御流之式之事
一 盃之盃式之事　三足の盃居　別々の島台なり
一 銚子渡取渡事
一 盃台所局之事
一 除熨斗之式之事
一 出陣帰陣祝式之事

一 酒加減之事　以上十三箇條

一 主人
一 貴人
一 上客
一 等客
一 下客　以上人品五品

一 平伏
一 蹲居
一 目禮
一 膝行
一 会釈　以上禮儀五品

一 上手
一 中手
一 下手　以上取扱三品

一 腰物
一 火打袋
一 扇子
一 足袋
以上用類之品四品

引用書

進退記
請取渡其外記
貞順古實集
伊勢常貞記
風呂記
軍陣聞書
人唐記
太刀之大事
私刀記
陪膳記
家流問答
禮格傳授

貞助雑記
貞順古實聞書條々
貞順記
故實雑集
武雑記
軍中記
出陣聞書
長録二年以来申次記
萬臺積様書
萬臺積様繪圖
酌並記
貞丈雑記

結記
武家禮法古實
宗五記
婿迎記

貞親教訓
大的式増補
兵具雑記

伊勢家相傳稽古筒條目録筆授

信濃 松代藩 飯島與作源勝休集注

使者 奏者之部

一 状請取渡事 上中下披露

書状ハ左の手ニ上書を上へなし状の下の方を持て状の頭を我左になるやうにして持ておし帯の通りよりおろく持出し口上を申すのかく右の手をつき申し口上申す内も状ハやはりたの手に状の下の方を持状の頭を左の方になるやうにしてひざの上に持るゝ子細ありし相渡し候時ハ状をたてず横にして状の下の方を持りさまにまいてさし出して請取人ハ左の手をつき右の手にて状の中程を取へし状のうしろの方へ手を廻して取次なり取てたの手に持直しく候し取る人の持たる如くたに持し又渡す時に取次人に渡しても取次取る時は右の手とあふのけて状の下の所を持左の手をそゑしてそのたの手とハ状の頭にそへて取る也へし惣別状をたて上ハあさぬ物也

称りして出へし軍陣にハ立て参りたる敵実に於てハ立る事の無し在
人へ披露の時も人に渡すに用し文状と名付しにおるものハいかにもさしと
云伝ともあれども不審只立ていてすをいむし文状と持て後に被附さきの
亭主へ未に状を渡すものにても渡候同前し前々の亭主一段賞翫すへき
人なりハ状を持て持と中へ参りて本座へ向てちとひざまづき人して御
中へさし状に在る時亭主只出るへしあるハかしこまりて末座にさし出
て立へし

一 状箱請取渡事

文箱に状を入るに貴様よりきたる文箱に入る状ハ箱に入さる状のご
とく也し但包の上巾と也し参着の前にて取る也紐をときてふたをあ
けてふたをハ右の方にうつむけて包文の宛所の方を我方にむけ箱の
内を参着にみせて披露申し宛所を先へむけ又ふたをして紐を結び
て又返申し宛所の方を我方へむけ蓋をあけのけて持て渡す也持て

右の手を先へなし左の手を下になして持て渡す也文箱の内を参着
にみせすして渡すものも有に是御内書なとハ必亭主出て事に請取る
まじき持に若し病気なとにて親類又ハ参着とて請取る時ハ先御文箱
をあけて内を拝見に及び中さる人にみせて右のごとく紐を結て渡すこし
又亭主出て事に不審なき時ハ御文箱のふたをあけて我右の方に宛所の方に
御内書の入るを三方の左の手にて前を持て渡し宛所の手にてハ前の方と
持左の手にていとよそを抱へ様に持て渡し左の紐をつき右の紐さとくて渡へ
し但ところ包さつくると不審な今によるへし又ふた中にてもおし入てきたるハ御
判の方を婦するたてつけて渡し参らすさの外へおきより候但とゆせられ
にも返ともに渡すの句にも同様なり同会立文の御内書ハ長く候石とく
せうにても包やうすまうるのよ風流の小文の御内書なとハとくこなる
にも及ますは又大名の内気主人よりの御書も足手添して面掛也し請取
状の事文箱のふたをとりて渡しとまふたをそへて渡しも右の手

其ハ名の中程を持左の手にて八ところにて渡て請取へし

使太刀馬代目録請取渡事

一 参太刀を持参目録を持せしむる使として其座に被着 先目録を開
ひらきと見て同含目録の上に太刀を置て渡し候時奏者右手にて太刀と取
同右へ置左手にて目録状を取同左の方に置一礼して立帰り人に被渡
中候時も人に渡し候ハヽ其ハ敬ひ封し目録状披て同含候てたゝ肴と
さしそへ置るへくハ字上に持の加り候ハ如様に差候へし

真太刀生馬目録請取渡事

一 太刀折紙 同様 但真太刀生馬目録有 但附而無之へし
一 進上ハ御太刀に法式ニ而蔵は鞘巻を太刀の事ハ不苦候きりし法式時ハ無用候
一 太刀目録ハ定まる物にもあらす太刀ハ持ものもあらす損しやすき持ものもあり
されとも是ハ其の座にて渡し候事古法ニ而封面ニ而の座にて候ハ太刀目録を
前にて渡し候て地へ置くへからすさるへくハ進上にても其にて渡し候へしと古伝の書に

見えたり太刀馬を進上する表向式正の礼にてきしむきたるものこ惶きことのほかと
定まり持のごとく定あるものハつゝしみの心これ有りと記し書
一 進上の太刀目録御前にて御封而紙の内未のさいのきに
取りめの方を御前へ取りして上に足置とかさねて其中むしなるものハ無し
一 進上の目録同様に用目録並折紙は文録の内三ハ同事にて候ハ別の
儀は能く可有口伝

太刀并請取渡事

一 太刀の請取渡の事太刀并之進上ハ其に置すして中ほとをあつかふこ請取渡様
上の上上の中上の下中の上中の中中の下下の上下の中下の下迄都合九段有し
是ハ作者も有来にしあきらかならんしく数又ゆるまりしく覚
えしくハ百四品を能見きしまへ知るへき事にてハ口実ハ第一稽古に入て要
其れ太刀持する手を取ると一筋のあしよりゆの方と左の手とあての
けく持左の手を柄に添へて取りするこ第二稽古人に取りてされとも

なかき人ハ左の手をハ持なからにて左の手を柄にそへて納めること本
三等半ハ後の足の爪と右の手計にて持て左とハ膝につきて出ること本
四等半ハ一の足の爪と右の手計にて持て左の手ハ向さしの上に置て其足を
一人によりて左の手を膝にもつく(つきこ)候事様子人により前
あひ手をあふのけ右の手にて後の足の内を持左の手にてハ後の足の外を
持なく候事一見事ニ致人あり然れとも中々ならぬ人の出さる
とも候事候間前ニ見事二ニ等半の出足をハ諸足の爪と右の手ハ
出て候へし左の手とハ膝に置つく(へし見事三ニ下半より出さハ一の足
の爪と右の手計にて候へし左の手を膝につき又ハ向さしの上に
置事人によるへし見事四也

廿ケ条 進退記 一之巻ヨリ出ス如此

一 太刀進上の御使者として 主人太刀同躰使者 私し太刀斗持参候事

同躰ハ一具ニ持ナリ

持参候時太刀進上之(きての)先主人の御太刀
とハ右の手に前のことく持へし 私の太刀をハ左の手に提て主人の太刀より下け

太刀斗ノ条ナレ氏文面ワカリヤスキ故ニ以朱加筆太刀同躰ノ筆提トナス

く持へし 披奏者の前に出て候時私の太刀をハ左の方に持ち後の方へさけて置
て扨主人の太刀をハ前のことく向さしの上に持参りて左の手とつき口上を申扨太刀

太刀同躰を持ハいつものことく右の方に置くへし

を置きて太刀斗の時のことく中出て置て扨次に私の太刀進上仕候由披奏
披露し終りてとて左の方へ向きをひねりむけて私の太刀を左の手を
取り右の手をあふのけ柄の方を我方へ向け 又の方ハ我左手へ向けて左の手を
ハ膝に置きていかにも律く 奏者の左の方の様子さし置へし 為奏者我よ
りも下の者ならハ太刀の中程より下斗上を持て左の手を膝につきて柄の方を
先へ向け奏者の左手に置へし 右の手ハ引出し脇に太刀を持し奏者様のまへに
主人の太刀ハ前のことく候て右の手に持参りて左の手と右の向さしの上に置て
私の太刀を出せと返し使者 私の太刀を我右の様へ向さらハ披露すへき
中とも使者の右の方をも向て奏者の左の方へ向て私の太刀と左の手に
持て主人の太刀とハさけて持私の太刀とハさけて持て入へし披露の時ハ私の
太刀とハ脇に置て先主人の太刀を披露して 一礼して其の太刀を取て退出

にて使者なとに太刀進上之時ハ座へ立居へ中入て 柄の方を持せ披露し
使者の名字をも申入へし 御請ハ座のことく一人宛ニ可申 主人の方をハ
亭主の左より三尺斗ニ可置也 其の方をハ三尺斗ニ可置也 是ハ
の請取渡の事ハ人の相知事なき也 又主人の太刀ハ前にして 其の方へ
置候 先主人の御上とも申候て 請取の太刀をおきて 抜取の時もさきの
主人への御返答候て 後ニ太刀を持参へし 披露前のごとし

腰刀請取渡事

一 腰刀の事 常之の方より成様ニ 太刀のことく何事も請取渡様也
のごとし 又我持出なと貴人の後ニて 請取て さしそへ候て 能候
人の手に渡らけ候も 御心得なり

打刀請取渡事

一 打刀請取渡し候ても太刀の 抜と大略同前にて 何事も 遠慮候
次に打刀ハ一様の儀ニ人ニ出し 何とも 御座候

弓請取渡事

一 弓を持て出る時ハ にぎりより四五寸程上を右の手にて 握げ弦を下へなすへし
弓本を先へなして持てあるへし 何時も持て出るに 握弓と貴人へ参り
する時ハ 前のことく持て出て 貴人の御前にてつくばひ 弓をとりて持弦を我方
の方へなして 左のひざをつき 右のひざをたてて 握弓と取手 弦を上へなし
弓の本と末弓の本を取さげ つく弓と弓の右の方へなし 右の手にて
末弭の少上を持 左手にてハ弓本と手のひらにのせて 請取へ進上候
又弓の方構なとありて 御乗弓にて請取候ハ 御前と主人の方へ すんなく
取なしても よし 弦なき弓ならハ 同前に いたしてよし 又ハ あ
本なとハ上へ立る物なれハ 出ると附候て別して出すへし とかく弓弭とりく
なすへき 弓請取ハ 鐙なとの事 請取ひ 持て出候 ひさの義同前なの
ごとく主人して 右の手にてハ にぎりより少斗下を持 左手にてハ 末弭の上を持可渡
弓を貴人へ渡する時も にぎりより一尺斗下を以 末持て 弦の方へ向ても

持参の時ニ進上の使者ハ縁ニ畏て首を左ゟ右ニ上たけ置て口上を申へし
立たけ所遠くハうしろへすべしと心へへし 但と我身の方ニ向て 右の耳ニ手をそへて
口上を申へし 首を持時上中下左右の心得あり 実検の時ハ何連も 下を上と直し 主人ニ
上を下と直したし 又首披露の時も首をたけても下を上と直し 披露すへし 此ニも前ニ
心得へし

一 空穂実検之事

靫を御実検之時ハ空穂をもうしろの縁ニ置て 左右の
膝をつきてうしろの方を上へむけ 左と我左の方へ向てまわして 矢の如く返すへし
実検の時も矢の如し 又空穂見ニ空穂を左の手ニて取 則左の手ニて縁ニ置て
前の如く返すへし 此時もさきを我左へ向て 返すへし 実検の時の手を出
したる手ニてとけける 空穂ニ縁を返し左の手ニて甚つきを直て持る迄
前の人の持たる如く持 立ニへし 此時悪く気色ハ流しけるく悪き也 能々
心のとけける事へ 下を入心を付て 実検あり 又貴人へ上る 時ハ其心つき

と右の手ニのせて出すへし 矢の根を身の方へ向の様ニ同し心なり

一 箙実検之事

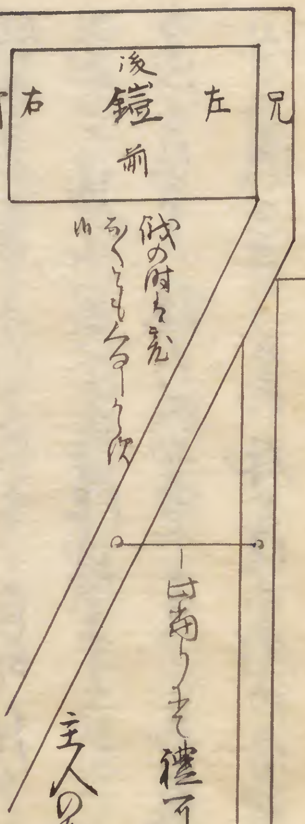
えひらを右（左）ニ矢添たるへむけて 口を上中にて箙を左（右）ニ持 右（左）ニて下を持 征
矢の先我左（右）へなる様ニ返ニ 押箙を右（左）ニ持て矢の方を持左（右）を上へ 実検ハかく
左（右）を上へなし 右（左）を下ニ直して 左（右）の縁ニなす也 矢の方先へ なし直さて主
人の御前へ持参申候と如何うしろて申て 人ニ渡し同しく御用り
うけたまハる 主人の左の方ニ置へし

（一本以下同シ）

一 鎧実検之事

鎧披露の事 主人の右の方ゟ段ニ左へて 鎧の袖をうきやは前見上候し
此時ハ主人御前へ参 鎧袖懸右の人ハ 押退のき時左の人鎧を押退へ 押寄
る様ニ仕直て 渡す へ押退 主人の気色ニ依て 押右の方と持る人と呼ふ
上座ニ手ノに 独ハ鎧の前の方と右の方へ向て引 膝をつきハてうす
いまたハ主人の左より来りニも右の方の人之ニ来ル也

主人



此時足踏ハ左より右時はこゝろへ候主人の左の方に向時も此心得

此通りにて進可申此時ハ足踏なし

主人の右より出んにハ此方へ廻る　口傳

一　後ニ廻り甲の緒結候かくに後候へ安置候又拵置候て　分別あるべし

腹巻着せ様之事

一　腹巻ハ袖を取りそこらみに前後より結せ前後共に取て腹巻の前後をとり人の方へむけ和合の方と取候様に着せ申候て人の前へ廻り前の方を着けせ其後に廻り前の方へ結て後より持廻るへし　何れも持候前の如し

胄着せ様之事

一　冑を着せ候ハヽ忍ひの緒といふものを取さうり(?)前後に立てて左の手持冑の内へ左の手を入右の手にてハ忍ひの緒を持て冑のまひさしの方を人の方へ向持て着せ申時も思召の向しつらひ左右をとんせ中こ(?)請取候ハ後より見合せ申時ハ向合へし又人ニ渡し候も同前と後へ廻り此時忍ひの緒ハ冑の内に入てまひさしと取り左の手にて忍ひの緒と又左の手に冑を持てところを我方に向て前の如く持へし

一　甲の手持の所に入甲の前後人の方へ向けて其さし此様(?)同前又甲を向てうけ候事左手を甲の内へ入忍ひのさき取り方へ向て前後をかへ中に渡す左を持て又其と見せ申候緒を内へ入申候

鞍着せ様之事

一　前輪を先へ向け後輪を我方に向けして右の手にて前の居木を持て出て人の前まて持ておく時に其て扱右の手を後輪の取付に付け左の居木をとり向て出

てまゐ方と人の方へちゝくに向て互に受取候ハゝ両先へ手をかけ左へ引返し
て前輪をさへ取りて持て下へ差披露の時も渡し時に同し　但鞍請なとも
上中下の差別なし　以上むかひて右の作法ハあるへき也

鐙請取渡事

一 左鐙ハ左の手に持右鐙ハ右の手に持てし　持候ハ鐙を重ねて右にもち手と先へ向し
舌先を揃へて右の手に持て出る也　捌渡時ハ手に置て左の手をそへて舌を一所に
右ハ右の舌先をそろへて左の方へ引返して　まゐ方と人の方へ向し　かゝちゝくして置て渡
し受取候ハたかの手を出して右の舌先を持て舌先を我方へ引返し　左右とも舌と
先へ向て持て退くへし　又持て出候時ハ鐙を二ツ向て左右の面へ出し
ら手左の人さし指もひつかけて鐙二ツを入て左の手に置て八鐙の表をそろへて出る
こ又鐙を向へちゝくて右手に左右のやかいえと持て出る也何連も取り置
向直し渡しの同前也請取候も同し　披露も渡し時に同し

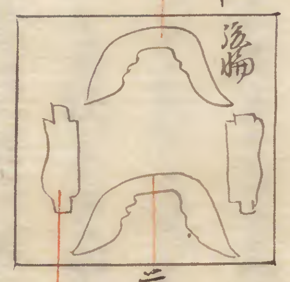
志りかけ鞍請取渡事

一 切付馬さへ志りかけある鞍をハ後輪の方より左の手を右方の馬そいの方へ入て左
のかいをに掛て右の手にてハ右の方をさへ左右ひとつにかけて持て出る也　ま渡候
請取候披露前に准し　如此くい異し　ある鞍も同前

志りかけぬ鞍請取渡事

一 志りかけぬ鞍と広蓋に入候ハ前輪の方をそく置ハ鞍是をこそ取鞍と申ハ
あしく候志りかけぬ鞍に申事なく候

圖



一 志りかけぬ鞍を持て出る事左の手に前輪の紋をむかへ取り　後輪の紋を我
前へ向け鞍の内を合て何連も鞍を持て右の手にてハ申紋二ツと一ツ手を
て出ることハ一ツ手に遠て持時ハ左と上へ向けても左と上手成とも持鞍に持へし

中役先を先へ向して持へし相方の中役ハ何まいらも上の方に成へし扨人の前に参取
の事先前脇を役の居る方と上へ向して尻さきを人の方へ向して参て其の正面
方に又後脇を役のたゝきを下へ向して内を上へ成候に参て中役二ツと鞍の前
方にも参又我か右の方に二ツ向ケ並ても参時ハ中役の右を左に参左と左に参へ
し其時ハ中役先の方を先へ向して是も左へ向くへき鞍のごとくおこして是れハおもて
ちがふごとく参へし又取候の者先後脇と取り扨前脇と取中役ハ先我か前へ寄
して立てるえさきと先へ我か左へ二ツ向ケて取事して前のごとく二ツ向ケて取渡して
持その人へし或ハ其の中さ取にてなりくへなし出る時も中役と相方になりくへく
参らかりよし前脇二ツ目の参候前のごとく也

轡請取渡事

一 轡と渡事左の手に相方の参つて相方のたちぎくと持て左の手ハそれみと
出へて持て出る手に参時ハこゝもち揃に参向からちとそみの方と先へ向して参こし
も轡と人の方へ向して参こし左轡ハ我か左たる轡ハ我か左に成候に参へし下取候

左の手とつき右の手にて相方の参つて相方のさちきと取門にてたの手
そみと出へて参て退くへし下に参ずして中にて渡し先渡して人の左の手の
所とこゝいの右の手にて取て左とハそこに渡るこし披露を渡時に同し

志ゝけ轡請取渡事

一 手綱おもらひ志ゝけ轡ハ手綱と上へ足前に取てうらうけに取様小縄にて渡て
参こ人に渡候ハ小縄にて出ひかると左の手に持そえと左の手を出へて渡し取又下
出る時も取手に持て出て其の中くちに参ち参候前に同し先取候左にて小縄そ
渡すかにと取て取て轡と取おさへ持ち出し右の手にて手綱おもらいと立一
後して立へしおもらいハ向くて手綱そへて志ゝけ出る時も同し披こし又披露に
渡す時のごとく也

鞭請取渡事 附披露

一 鞭と持て出候そつ佛を前に向しきさきと後に向して其佛の後を左の手
の人さしゆびにかけてそつ佛の所を持そへて左の手に持て出るこし扨其人へ渡

ヶ様御前にてゑぼうしと左のしやくにもちむちの手継と右のしやくにもちてゑぼうしの方
とあけて持へし御請取候時左と成さけ参すへき事等守以下に渡す時ハむち
の手継を持ゑぼうしの方とあけて左へまひかし右の手に持てたの手ハ無手につき
渡すへし又渡す主人ハゑぼうしと扇の上へし等守の人ハ人のしやくと左の
手に持てゐるへし　但守人ハ人の手の下と申すに持て渡すへし　細かえすかへて右
の捉へ戻る事一揖して退へし　但披露の時ハ右の手にてゑぼうしより二三
寸程中をとれお様く人ゑぼうしをあけて左の方へまひかし主人の御前に持て
参りたの手をゑぼうしにそへて行へし　進上して中にて跪る所へ一

矢の羽請取渡事

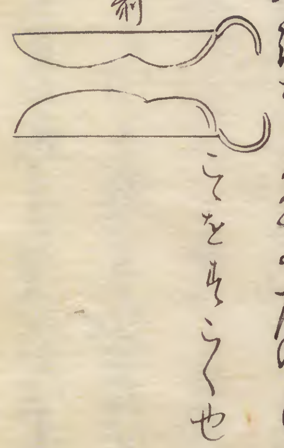
一　羽と申す出す事いく鹿成を包てくんならけ候ても扇にのせてさきの方と
人の方へむけて出すへしくんならけ出すへしくんならけのとめハ我方になすへし
扇のすすめる時ハ扇の表と上へなし扇の要の方と結紙の方にさきの方となし
すへて右の手ふるめの方を持て左の手とおやゆびの方にそへて扇子と共に渡すへし

一　出す一披露の時も御前請取候くんならけてうハくんならけてまはみとすへし
扇子にのせてうハねんそりそるへし

一　矢羽又ハ鷹の羽なとハ引合に包み水引にて結ひ上書へ羽の数何羽
へ成ならハ　但羽をハ一本ハ二本と申也一尻ハ中の方書

行縢請取渡事

一　行縢の事二ツともにかさね渡すと左の手にかけまき持て持人の前にさして
渡すとの人たたみて上の方とすこきのへ我前へおろけ同会にて又左にてかけて渡し
請取ハこの右にて渡の方をもちたてにてすそをもち同様に見せ申し文
たたみて渡がハまさにたのしゆふとして入退あるへし



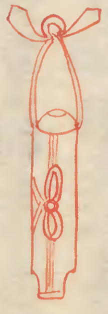
行縢ハ左皮と上に右皮をかさねてあるへし左皮より先きさき初る也せ

一　弦補指皮渡事

ほけ物に入なら物をやうの上書横ノ板帽子板ちうまま宇頭を我方へなすへし
おしやるまこつはあらハ人のたなまれてと向くまへし我右の手にてとりて
とおたの手へうつく帽子とけ物のまつめを我方まなすへしやさのとこてを
とめつめの方になしとりてはのうまま上書なる流ありちハこまやしこけ物のを
めとむすなしやさと帽子板におしへとりてと我たまなして帽子板へ
上書まへ書也

大和流弓道天之巻第三段ニ云 弦補ト云ハ鞆皆ノ如ニ拵テ常ニ弦ヲ入置テ云ドモ是ハ軍中エ持
時ノ弦補ナリ 長サ一尺五寸 指袋ニ五寸ナメシ皮ヲ似テスルナリ 私曰 底ハ茶袋ノ如クスルナリ
蓋ハ木ニテフチヲワク物ニシテ輪ニキセルニ 私曰 鞆皆ノ蓋ノ如ニテ漆ニテ塗レハ雨ニヌレズ
輪ノ豆皮ノフチニ金之輪ヲスルナリ 口ヲ丸クシテ置カタメニ 私曰 皮ヲ輪エヌイクルム 但両方ニ幅一寸長サ
一尺余ノ皮ヲ残レ矢ヲ両ハシクリ合セ矢筈ノ内ノ方エ掛持スナリ

図



緒ヲロト底トニ付テ中ニテ結フナリ

一　小袖指皮渡事

小袖を人に出すまの一ツたゝみてなてまニツにおりてわらえと上になして横に二ツにおり
へし上りえと上すにおすへし云 流あれとも左様ハ通へし 前のやうくわらえと上になして
おりたゝみ候て又一ツさのとらへ 絵ハ上にならぬ也 小袖を左のうゑに持て出し様ハ前の
ごとく立て手の方とさきを我方へなし 左の方ハ右になしてた
のうえにあけて右の手にて上へおさへて持出へし 又右の手にておさめてもよし
此時もたのうゑに渡す 持人にわたす時ハ右の手を小袖の上へ入てあまりにてつ
受取人もたゝみの手をとへうて受取と持左の方にても右の方にてもおなし
請とりまはしても渡しうる人のあとへもち立へし

小袖指皮蓋に入指皮渡事

一　小袖一重にても二重三重にても箱蓋にてもそのまゝにすゑて出すときは小袖の上を
板前に同しく一ツづゝ重てそのうゑにあつる事持様ハたの手とあをのけて手のうちへ
さへ左の手にてハ蓋のさきの左の方の中程ととゝめて出すへし人の前にて中にすゑ
出すたの手をぬきて左の方にたの手とらへて渡す蓋のうへの方とかへ人にむけ
りて左の手にちとさけて渡すへし受取人ハ左の手を左のわきの角にそへ右の手ハ前

の方ハ中ちの左ノ手をかけて太の方へ一寸よりし〆 又本ノ一両太のゑく小袖
の方残方へかりゑりの方さきへかりにも付太の手をそへて太の方の中ちと持上け太
の手をかへ入て御して人のあひく持て立つへし 但懐紙の時ハも人の左の
方小前のあひくもちとんちへて主へをし同じかりこし給ひとえかとも同様にあさつ事
広さらハ左右の肩ちをとりて退へし 広さの時も小袖数多くておきてそ一人
にて持なくハ二人してそ舁て出へし 広さに積み重ねて進へし 広さに積み重ね進退記之

上下請取渡事

一 袴肩衣袴の前腰と上になし二つにおりて掛の方を抱左になし 横に置こと
肩衣と小袖の如くゑりの方を先へなし 肩の方を抱左へなして置て小袖の如く
持て出て渡すへし 広ふたさなる時も小袖の如し 又野山なとにて何も広
ふたなくて扇などに置へき時も扇の上に置肩衣袴だくり袖にして渡へし 受渡
袴も小袖の如し 又上下の時も同じ事也

一 肩衣袴の上の袴を二つにおりて其すその方一所に腰板を重ねて肩衣とあわ
のけて袴の腰と肩衣の紐とを一所になして袴の前目と肩衣のすその方を重ね
人の前へ置へし 中捉如此受取りて座にて上下の時も同前也 小袖又ハうら
ひらの上に置時ハ肩衣袴横にかしらは 様子不可〆侍なり

扇子請取渡事

一 扇子を受取には先扇をさし出して受取へし 先扇子を渡す時右の手に持て
中へ手をうけて受取てたゝみて膝に付へし 又ときまかせて置へし 受捉扇子の
受取様渡す人の右の方のさきへ寄て貴人より受取時ハ右の手のうちとあふの
けて大指と受取へし 等輩より受取ハ左の手を出し大指の先と添へん
とすへし 渡す人ハ上の方をとらせんとすへし さのみ礼をして扇をとるべし
ハ目くらくのたる人の手の上へ我左の手をそへて やうそ人さしゆびに一寸し
て掛たの手をとりて可請取 下輩より請取ハ大指の上の方を取へし 掛
親指と出して時大指と左の人さし指に添てして受取て太の膝に置へし 掛ね胴に
骨を立てさてたの台きをとらせて大指さそうきと云ふ 大指さぞうきの仕様太の

人さしゆひに大指のさきと合せ大指の中節に当て当るへしあるたるへし
の人さしゆひ中ゆひの間へ大指をかよはして当へたてつけて鞭はなる
物にも候へし又いとあつきと大の如くたてつけし候へし太緒の長サ大事は六
尺五寸八三尺八寸によきと八三ッ鞭と申へし短きは二ッ鞭のかた様にも成て
鞭へし物を宮初とかけるに鞭の上手は足軽手にてあるまし其足軽手成る事
の鞭を着て小指ひし薬指の方へまかりむかふへまさみ重ねめ毎大指さきさき
しく物鞭を取上け鞭とあてて尾頭を要にて鞭のあて様同前し物鞭
持たるへしとつきて鞭の前様を請てし物鞭を持さして大の手をつき
一禮してた出へし鞭は流ヽあるへし中にも先ハ頼政流請防流大つ紀す
鉦を請防流之鞭ハ公家の物として候 武家ハ人によら鞭の道を案内して
以て長公方は奏者ハ当座として鞭請取の下ニ重き鞭ハ今へめよもいはん
として又武家にも法令有之事中にて公方は他国世に案内として重き事を請候
にあるへき鞭鞭の奇事を限歌鞠を外武家の所作にあらさる芸能同し

候し悪しきものは家の鞭を何くはなし 他家の目の様人ても渡し候時
のかく鞭とあてて白物尾の上へ鞭と入こふしと返して渡と惣目同
也馬上にあつけて惣御目にあつかは先あつけを一鞭御目物をすゝとみをかく
し大事とは物ならは先大事を御目にかくへし物ならは鞭を惣御目也

一 馬請取渡事同引物の事

馬を人に渡事大手に花をかくしておもてをとらせて手綱を取て引て出る物請取人
主人其人前にて向てハ請る方にて物へ請る足をとらせて持たらせたの手より先へ
出さし引右の手の足ふと渡す人へし取る主其人よりも外をまはりする人ありて左
の手とは其の中にて足ふに持たらせ大の手の足ふとそえ一ヘリまはりとおもて進
退をいはんにして渡すへし等早に渡事なしは渡し様同事しさのみいはん
とゐへのり候又我被度内の志をもて門出て唐る馬を渡ひ時ハ何にまかり候ハ
てハいらぬ候に渡しても其分の候渡事渡人の去の方にそえて渡へひ候
渡さす時ハ立てそれへあまりし其人ハ存候中なとし主人其人の引て出入物時

ハ馬貴人の方へたいして得る矢尻也 主貴人ハいか様にも御座あるべき
事なれバ其のまわりの方なりとも向ての方勝手もあり出しかね事と存候
處也 貴人引替て間のあしき事ハ悪し 又主貴人よりおほく居給ふ人の
前を通る時ハ進退をいたさんかして引居る人の左の方へ捨ても上ハ手綱に取り左右の手綱を
出させ時ハ太の手にて綱を外したの手にたつなの中より傍につれて太の手にて
を廻て掛引する人の退る時も後へのり居て前のめりに左太の手ハ見合をして
引し一寸半か半身の返す時に引人の太の方へさし出て太の手を綱を取た左の手
にて手綱をゆるり傍へすして上よりの手をやりて太の手つなを取て後ろへ
したに一寸ほどに引き給ふべし 又内の者なども引て居る事ハ何し居ても苦しからず候
又主貴人の御前にて馬を請取事あらバ馬を主貴人の御前を通るべからず候
馬の後を廻りて渡す人の太の方へ来るべし

一
御成の時公方様より進上の御馬御目に懸る時ハ御成中(外にて)御亭主の家来引
て御目に懸其外の客人の時馬進上の時ハ家の子引て見せ申べし 馬引役

人或ハ正の時ハ両方を廻て引と存候 一に供ハ馬引の王座と存て何れの時も兄
弟の中よりけしと存し 一 侍の役ハさや巻をさす 一 侍のえもんとるべし 腰にさして
御用をたく 一 其外主の方ハ足袋をはく 一 略式の時ハ素襖
をも用 一 其時も足袋けさや主御用足半にて同前に引馬と一所にハ
直垂の外をも手前をとりもち前別当の前を請取て太の手綱をたの
手に二つに引かけ掛ゆるしてつなの中つて持つ太の手にてハたの手つなの廻りを
取て引たへたの手をとりて太の手をかけて馬の左の前近く寄もたせておく
ヘ静に引て出し 一 掛御前の方へ向きてあるを引来へ太の手にて手綱をとり
直垂へ 一 手綱の据様 一 扱ハ先馬のたの手綱を太の手綱うつかけて取て
上よりの方へまわりの前をとききさげておかりの前を持たの手にてハ馬の左の
前へ手を添て取りてさし付けて持し 掛手綱長き進ハ左のの手綱とする
之短き進ハたの手に手綱をするし 手綱ハ惣七尺五寸の物し長と云ハ七尺
五寸より長きと短と云ハ七尺五寸の手綱と云し 手つな短てたの手に手綱と

すへき也しハ手ふりを持くる右の手をもつてあふミすりつく持てその上左の手の上
へやりてたの手ふもつてを持なりくる右の手の小指ひのかた也さうしくる手綱を
逆手ふ握る也ハ左の手の上へ下り鞭手綱の具を乗也ぬ無縁弓手ふ鞭をとしてもつて手持之へ
降し掛右の手ハまへりと持なりくなれくこなへのけてかくと手をあてた綱
のたるみくるを取りあいせて持て左の手ハそのまゝ右の手ハさけて了へし引手
綱長くしてた大事ふ鞭を上へき也しハ左の手ふ鞭の法様前のかし掛右ふ鞭
をしそ其ふ右の手とさう手ふしてこなさへちかくのけてし手つなと取り合
せるか方左の手つなハつるをてみる也手時右の手ふまへりを持るまつくる手
さすして馬の左のもつての上へやりてたるそくるたへ手つなと二へ下り鞭よなる様
手持てたなつると手きるかつちかくも右の手とこなへの手ハ右の手ふ鞭
出来る也此時自然よ手とし順ふなる也たつなる長き時ハ無縁弓手ふ鞭をしそた
手なるく右よさけて了也掛手しる馬かくハ右方と顧也自然へし手引様之右の
如くたつなと取り弓手綱て掛左右の手よたつなると持なりく左の足と右の足

の前へふみ出し右の足と馬の左の前足の通りへふみ出し又左の足と馬の右の
前足の通りへふみ出し左の足と右の足ふみかゝる手をもてさうしく出して其の手
向て立へし此時左の手ハ右よりもつて手ハ手つなの鞭しを持てある也右の手
手ハ左ふ添の鞭を持なりくしを手とてるの上の左の方へ向て左の裏のもつて
と持て馬の面と門之馬と二三足うしろへさゝりして四の足の爪をこみ揃へ
させへし他之さしね馬を無理ふさゝするる事悪し右の如く二三足後へさ
らせして掛右の手とえるかし左のもつて手をとるの下おしひらけて馬の右
の後足まりその如く馬し並て立て馬の左方と一周りして弓手膝をかゞめ
て跪し進上る也是馬の面を内へ向て次第こ掛弓絶せらるゝ程の手
おためひかりく裏のもみとかゝうこなすへし是よ乗こ掛馬の方を
そふしんて又左の足よりふみ出し一足を左の方へふん出し右の右足を三足
ふミそてるの右の方と顧ひ自し此時ハ一足ふ向て立ち左右の手もて右のもつて手
を持し御覧せる身ハ右の方かためしひ掛馬の方をそふしふんて右の手とこれ

おし左の足より少ふみ出し馬を左の方へ引廻してくるのうしろを見せ御覧じ
但うしろとは去向ふは七半寸ほどかたちくてくるとまでて見させ申し此時も
手に向くまで左太刀の手を我の鞘へ手を掛御覧せられ候弓の名かなあ
らひて相伴衆の方をそとにらんで扨る左手の鞘へ手とるの鞘きはのよさお
しらけるを右の方へ少しより御見廻しるの左と目見に御出る此時
こそろに向て左太刀の鞘の鞘へ手を持へし御覧せられ候弓の名かなあひ
て相伴衆の方をそとにらんで太刀の手をとれ出し右の足より踏みおしまくと右の方へ
ひん廻し押して三足ほど退て立出完勿の如く馬と御前の方へ向て立て
左太刀の手に我の鞘つてを持て二三足退さり四の足の爪と踏み揃へ
させ右の手とるおしよけるの右の脇へ立寄りて蓋て立てし足文るの
西と御目に懸ると御覧せられ候弓の名かなきめひて相伴衆の方をそとし男馬
をたの方へ押し廻してつて帰るへし厩は左の方にまはし右の方にまはし
又はまふくんだす馬の左の方へおしまはして帰るへし神前の門へくる様なり

右の方へ引て帰るの所の左右の様子は先へ西方二右方三後方四左方五宗
西に安御目に懸る也是を四方を御目に見せ候と云御目に懸る時馬頭とさけ
を口にあてて引へし引くものにあけて口をあけて廻て立て西へ頭のけ毛
きそて立るは口にあてしてそろめてまう鳴てつへし よろしく引てそ
くまる国家の平直遠く又は其様に出越しへし馬やんまでとも出しよりく
実は様に引へし統ある後は御目に懸へし次自然御覧せられ
よりは敵首へしよくり御覧の時後を御目にかけ申しきかの実よ
いそれはさくし軍陣にては死後を御目にかけぬ也左手を後ともに御目
出越へき也

一 太刀二振帯取様事

太刀二振一度に出る時は総て出し上の太刀の柄は下の太刀の刃の方にむき一持
柄は右の手にてむけ太刀二つの方へさし指と人太指は刃の方へかけ鞘る二つの鞘
はむかふの方へかけて指し中の鞘時は是を大人へは中にある太刀のうへしねへ左

のしをのへて中に置候一等半中半又ハ二寸程にか成し請取時ハ先上の太
刀の足皆を右の手にて取て右の脇に置又下の太刀ハ左にて足皆を前て
右の脇ニ前の太刀の外に置て前の太刀と後に置たる太刀の上下の所を左ニ
の如く取て持て立候一初太刀を取上る時ハ先人より等ニく取の手に
足皆を取候一等半中半より取候ハ付の上にて取候一右の脇に置時ハ
刄の方を我方へ向して置べし

太刀と小刀請取渡事

一 太刀と小刀と組て出さし小刀ハ上太刀ハ下に置候一小刀の柄ハ太刀の刄の方へ
向候一持候ハ以下同前

太刀と腰刀請取渡事

一 太刀と腰刀組て出し太刀ハ下腰刀ハ上に置して腰刀の柄刀の刄の方に向て可置候
一太刀を上にのせ出すと云説あれども夫ハ悪し一持候ハ以下同前

太刀を同請取渡事

一 左の手をうつむけて料足の方をあとに成して挽て持候一太刀ハ左に取の外
ら持候一鞘口上に向ハ要脚と左の脇に置左の手をつき右にて太刀持ながら手
を左の上に納め又ハ太刀の小尻を机につき以上を中程にて左に料足
を前て取の手をとり出候一先要脚を置かくして左の手と机右の方へ向て
やり候ハして横に置挨要脚よりあるくハ小太刀をも左の如く置て渡し請取
候左の手にて太刀の上の料足とさかり前て右にて太刀を前へ我方へ向
か候ハて太刀持たる左の手を打の上に納め又ハ太刀の小尻を机につきて
立人中中のき少中に立候一三面足上ハ目付て出て渡候一五面足
以下同様にて請取候一同機様の事渡し申時の如く置候一料足取
中之ハ鉄同事ハ不一同様を以て挽要脚一太刀をハ鉄同右に置ていハ
右の如く申候一法の外不違ハ見てよろしき挽に其と可して

太刀と弓請取渡事

一 太刀ハ右に持ち弓ハ左に持て出て先太刀を左の脇に置て弓と渡して次に太刀

をわたし請取披露の時も次第同し持様渡様請取様披露様の様も作法も
前にあるがごとし

太刀を具足請取渡事

一 太刀をハ右の手に持べし具足の上にをく手を入てよこかみと左右の
手にて持て先具足をハむかふ様に人の方へ向て切付同の方をみせる心にて
持ちかへて人の左の方の手にて扨太刀を八人の右の方に向て渡して請取にも先
太刀をとりて具足に取添て持べし

使太刀を状請取渡事

一 状ハ太刀と共に前に持て参会に対し太刀をハ右の脇に置右の手をつきて左の手
にて状をひざの上に持かへし上をかへし扨状を渡して後太刀を渡
すべし

真太刀を目録状請取渡事

一 太刀目録書状之時ハ太刀腋かけに置から左の手に目録の上に状をかさね参会の前
へさし向ひ太刀を左の脇におき目録書状をかさね左の脇におきまへに向しより
傍として其条目をよみて文を左にて取上右にて開ひらき読畢て奏
者の前に置左を附左銘をよみて扨目録を取出して披て見合たる文より
上方に置奏太刀次目録の上に置出て取て附奏者まで書状を左に置て取左へ
なをし扨太刀を取左へ置後目録を左にて取文に取置[illegible]申候て
ささけ主人に被披露の事右同前し

一 太刀目録に状を添渡様太刀目録ハおのおのごとく持べし状をハ状の上書の字頭を上
外へなして懐にして懐に入て持べし先奏者に逢ひ目礼して扨太刀目録
ハ右の脇に置べし置様ハ切右の方へ膝を立て向けて目録をさして置太刀の
脇に向左の手をとそへて次の方と我身の方へおしつけて目録の中に
のせて置べし目録の字頭ハ太刀の刃の方にする也扨太刀目録中に置てハ奏
者の方へさしむきに置て左の手にてそえて小袖の上より元の通りを取て右の手にて
状を石の頭を持懐より引出し右の手にてハその儘字頭の方を持字頭を先へ

おしりに置御名の紐をとき蓋を取のけて出すへし　以下前条見合へし

一　鞢ニ太刀請取渡事

鞢ニ太刀添へて進上の事在時ハ太刀ハ右の如く右ニ持ちくハ左手ニ弦木を持又ハいつれにかけて弦木を持ても苦しからす　扨鞢を中に置て太刀を右の如く渡して後鞢を渡すへし　請取候ハ先太刀を請取て左手に置鞢を請取て左手に置左の手ニ鞢を能持定めて後太刀を取て居直へし　又鞢を渡して後太刀を渡すも能し　此時ハ太刀を我右の脇に置て鞢をとりて前の如くに置て渡し　扨太刀を右の如く出へし　鞢ハ我左の方にまかせて置太刀ハ鞢よりちと脇の方へ寄せして右手に置し　請取候も先太刀を請取て左手に置て鞢を取上け左の手に鞢を能持定めて後太刀を持て居直へし　披露の時も渡す時の如し　差上けぬる鞢の時も持候以下前に准し知へし

一　太刀と鐙請取渡事

太刀をハ右の手に左の如く持鐙をハ左の手にて右鐙を付右先と持た鐙ハ多くしらと上に握りかけて持て置先太刀を右の如く渡して扨鐙を渡すへし　鐙を上に握りて鐙するを中に置て右先を持する時も前に申ことく置する鐙の右の方に直へし　扨太刀をハ右の如く左の手に持ながら其上に置て左の手とつき手に個に申て扨太刀を渡すへし　去請取候て前の鐙の右先と持て直すへし　置て前の如く申すへし　かたち〳〵よしく家方を人の方へまかせて置て渡すへし　請取候別候すへし　先太刀を請取て扨鐙を請取へし　披露も渡す時の如し

一　太刀と矢羽請取渡事

太刀ハ右の如く右手に持羽ハ左手にてくさきを人の方へなして持へし　扇子にかなかけのことくなるへし　候前に同し　渡す時太刀をハ我右の脇に置て先羽を渡して後太刀を渡すへし　請取候羽と先請取て後太刀を受へし　別候すへし　披露の時も渡す時に同し　但大羽大鳥の尾ハ十四枚小鳥の尾ハ十二枚自然にめあしく何かなし

小袖と太刀請取渡事

一 小袖前のことく広ふたにすへて其上に太刀をのせへし其役左の手に広ふたを
持て出て人の前にすへ置へし請取役太刀と小袖とを手をかけて取上て太刀
を右の手に持小袖ハ左の手にうけ取あけて退へし渡役ハいたゝくへし
又広ふたにすへ置時ハ小袖ハ左の方ハいなかけ太刀ハ右の手に持て出て小袖を
左の手に取出太刀を渡して請小袖を右の手に取て渡し其役別に請
取へし人の役に随て渡る太刀ハ右の手に取て掛小袖を右の手に取て渡て請
前のことく持て立へし

弓と矢請取渡事

一 弓ハ左の手に取て左に矢と先に取へし弓ハ上にかへして弓の上よりかけと
おしを持あて矢をとれの手の持の上にかけ先に持て肉外をおさへ外に先をなへし渡役
ハ左の手に取て左に持右にて上と持添矢の先を左へなる役に渡す九分
の内ハ左と上へなし右と下へなし渡役にて左の手にて板のかた上を持左と添

右の弦へかけとりあつかふと数の時にハ弦と肉へかけ取弦ハ外へ
返しをし弓をたかくて矢のうらを持左と添渡役左と上へなし右と下まて
添左の弦に取てハ矢のうらの先へなしハ弦も肉外へなしハての役人も渡役
人も敬の手にて取剝なし持主人ハ前へ持事也弓と取て左へ取返して
を左に取返しよりて下上弓と人に渡ハ又熊ハ同前左へ取様にとも
渡すへく熊ハ同前に主人の方へつき置弓の役に征矢も取にても渡て
射絵なくことハ又取に請ハ弓征矢ハ請取にて弓と左へ置へし征矢と矢へ
取ハ又弓の事上中下により右の手にたかく持取てくもちにて人の手の
上中下の剝と請ハ又弓征矢と先継取へ持出ハ時ハ弦を下へなし板のかた上
をも持ハ又出居の取家にて渡し中事様に渡し中ハ未だ家左へなし
弦ハ上へなる役に置へしハ何も左貫きさるへしとてなし也

弓と空穂請取渡事

一 弓とうつほ一度に渡ハ先弓を渡て後に靫とつ渡ハ但其人合て則渡す

いづれもうつぼ合わせて後に弓を立べくは法式なき故に矢のごとく立べし
又うつぼの上をさしくつろげ給用なくし此時封して其のうへ封をとくへ
うちをまへふくたるへし はうつぼの事は騎馬うつぼの事也 かちのうつぼはやまと
うつぼしやなり

弓と矢筒請取渡事

一 弓渡へ弓と矢筒と持來の役 弓ハ前のごとく左手に持へし 矢筒ハ左の手に持ちさやの
方をおさへ柄ひらきして持へし 主人に参りて此時ハ矢筒を左の根本に持て
先弓を参らせて後矢筒を参らすへし 矢筒の出様矢のごとく出すへし

鎧甲請取渡事

一 御鎧参らせハ為人して右に持て 奥にゆき左をかきなる人ハ下に左ハ上にし
右をかき為る人ハやがて退出ゆ 右かき為る人そし御奥足すに手を立へ指出し
上前にすゑには組子 細川殿御前へ持参りて一人して 引揚参らせ候ゆゑこそ
御前の事に立て上にて御前かぶしもぬきあるべくは私にても 同前

一 鎧甲を上の事かり御前の間をとく時の中に胴をとらせて鎧のうしろを
みと横木にかけ後うへのとを懸しても かけてこれ上に甲を置 甲の法には
さけて置し他家には法を横木にかけみ 仕る南家も用いるとも 袖とも
そのかみに身あてし袖の法をかけ是にもまたひ身すこしまへ置くといへども 左右
袖ありてのたいに置も左を上にかけ其法は内の方に入置ず袖ありての前の方へ
置ての後の方ハ鎧の前の方に成して其ありの後の方に置き掛る人にて
かき出るり持出様前の鎧請取渡の心持なる見合へし

鞍と鐙請取渡事

一 鞍と鐙一具にして出る時は鞍は前輪を先へなし後輪の方より馬とびの首へ
右の手を入てうつむけにして持鐙をハ左の人さし指かけて指二本をたがひらへ入て
持ても手を先へ成し 左右をも引合せて並て持へし又左鐙はやがいに右持右鐙
ハたがいしらへ中指を入て持なり 右のごとく持て出て掛先鐙を我左の方に
置鞍をも右の方に置へし 一人の時左の手を添て取次て置へし 人の前に

主付の人の方へ前幅し出方のたてる程にたみかけて直へし折紙を鞍の後輪
の通りへまへも成程て尾を手の方とかたみかけて手の方みにおよせて直し
其引と候の羽を出すにはあまり手つきに直すには下〆申し可に直て加え(引出て
拵ゆるへし 太ハミたけたる鞍の時の手(さ)鞭は手むかう の時ハたの手と後輪の先
足場方の下より入てたの手綱を取り上る 然し候に二也一寸ほとに通りを切先を奏衣
事也鞍を落手上て前輪を何方へ成るも 徒手の然示を取て遊ぶに足し
て我右の方に前輪とたへ成候に直折紙をたの手にて舌先へともやるハで
出ても持然示を取て我方に直て折紙を持定めて鞍を持て下直へし披露
の時も 渡し時も同し

太刀目録ら請取渡事

一 太刀目録らの時ハ太刀目録一具に持ちをたに持ちく座へ立とり持た
刀目録左の如く渡らを前のら矢筒の時の如く渡持先て披露ある
前条の如く令へし

太刀目録ら状箱請取渡事

一 太刀目録ら状箱を時ハ太刀目録左の如く持状箱らを介添に渡し持ちは披
太刀目録如前渡し状箱を請取右の如く渡しからを向方むへくも
介添出らハ介添に渡し又状箱らた手に 介添に渡すのもまて 又向方を
介添拵らけ置 居ハ奏者より受取事もまて披露以下同候

太刀を冑 請取渡事

一 太刀を左手に持冑をたのひのまへよくとりて上へ拵らさる居にかして
たの手にたく(可致)御目録によりておゐてのも此紋南流にハ此方の
別手あけ渡さる渡時ハ太刀より渡して甲を受取

太刀遠中にて請取渡事

一 請取渡候はくおつけ太刀渡す事 座敷にて 渡すに同し 但つくもし
て渡さへし ひざハたくへし次 又道ても立まくてか中も直遠中にて
さまざく可付時ハ中中く渡すへし 但 太刀目録を時ハ 後古聞余

具の曲よ [illegible] 見合へし

以上五十箇條

軍陣禮事

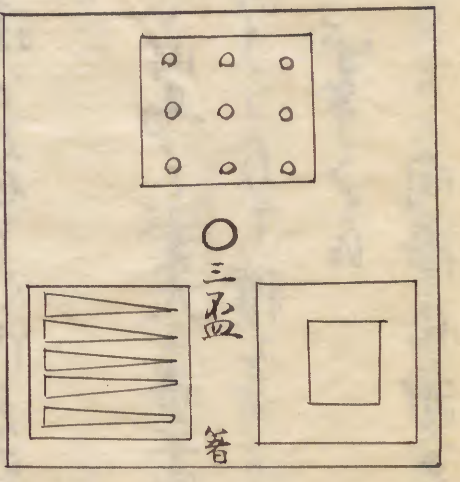
大将出陣規条様

一 主人の御前にて具足ときて御目に懸申次者先にむけを御用にあたゐひざをつき折る左の手にてつきはひざをおさへひざをいうせてかたの方へそむきて其後右の方と御目に懸申以前の如く左の膝をつき其膝ゝ上を右の手をおさへひざをいうせてたのひざを立折る其膝の上をたの手にておさへかたのうゑへそれをむきをして何とも仕申し自然後とえもよし作あつへ御気に付くして後とえもよし御気のあくしてハ後とえも申し様ゝ申さるべきなり

一 出陣ゝ時馬にて貴人に見参何ぞ持ちたる物のうしろえずをかさけてくるのかさへのりかりて禮を可申両貴人の方へ向して物を申ち[illegible]をるべし是ハ[illegible]事にて候

同陪膳酌之事

出陣之肴組



一 出陣の時打あはび昆布ハ御勝悦と云心の祝ひのしなにてかずハ七九五にもる事七よ
り九より五を表とする事ハ一ッにハ数一ッにきらふるにつけて也

一 出陣の肴右の絵図のごとし一番に打あはびと昆布からし右の手に箸をもちて
昆布のはしを取り左の手にあはびをのせてひとつに手にそへてすつかりとさき方とそと
合てさて座さき方とむそへて瓜食て右のごとく出て酒を呑て其盃を左の方の
手に置てかち栗をそへてくひて又二番めの盃にて出てはじめのごとく呑て一番の盃にかさね
ておきて打こぶをそへてくひて三番目の盃にて呑てかさねてもむしめよりのみ也

盃に重て三ッ盃とひとつに手に置てなのごとくかきやうにてもわかきとても家の
主時ん中よりちかちかてよろこび肴とさき祝んする也

一 出陣帰陣の砌の肴仕候人ハへの事さへ申くする人ハいさゝかも[illegible]
そさゝぬ様に物取人池に主人に持むかひ其時主人床机に腰をかけて御盃ハ
其時取人もうけひさまづきて肴に主人其ひさに座に御入の時ハ取人もひざまづき
肴へりさて九のん持て主人肴をとり盃を御請有て先一番ニハそとして三
献酒とこ二番めの盃にはつきてさて左の足へと一足ひきてくハ
へて物見ての方を踏みかけて主人ハむすび座て物酒を三度つぐ事物三
ッ目の盃にハ一番の盃のごとく三ッつきやかて肴主にへんする人も主人床机
に腰を掛てめはしめにハうけ播てへつる事取人へひきて人々の時取人の
左の方へよりて人へ申事物取人の肴台を見手に順て前を又去取肴
足をひきすゝしてこの後身をもとへうつして次にして取中人も何にれても
時によるべし

一 主人出陣の時酒の御用候の事酒を御待ち時盃とかけも出陣ハ出陣も
のこのかずハのみの口ハ酒をすつる 御請時酒をこゑさぬ候ニ御用立ぬる
又云 敵人酒つきゝ時成ともくハへの人かる時成とも 酒と かハりてもよし
しゃくハ其酒を主人うけぬはし 御心得可有也

一 同主人出陣の時門出ニ 酒御用 の時御ハ上とも御膝をつき申ぬよの
こ帰陣の時ハ不御帰可有候

一 敵前へ寄加へする人とも 出陣の時ハ上とも膝をもつきすして呑むしくハへ(もするなり)

凱陣祝義候之事

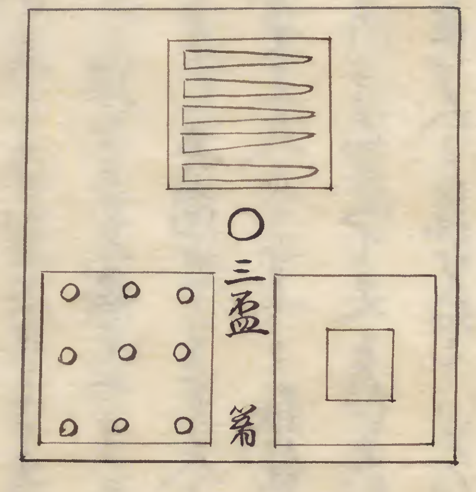
一 帰陣之祝の時ハ初献ニ勝くりとくハひて酒とのむ二献目ニ鮑のあるき
方の方紀とちて切てわきに置て一切めよりわき紀尾の方へくハひて酒とのむ三献
めにハこぶの両方のきしを切のけて中をくひく酒とのむ(きし) 鮑のくひやうバう
出陣と帰陣しかへる也

一 あはびとくりとハ出陣帰陣と盃候する 鮑ハ出る時ハ左こぶハ無前盃不有る

可有也

一 大将ハ三の盃と初献ニ一ツ二献めニ一ツ三献めニ一ツ以上三ツ盃のむべき也

同陪膳酌之事



一 帰陣の時の肴ハ右のごとく一番ニかち栗勝あハ二番ニ鮑三番ニこぶ足を右出陣のごとく
三ずつ喰て酒と呑申まちてのしてよろこぶと呑んする也酒の飲やう盃
の呑候同前なり 但帰陣の時ハ盃とおたくはむけて更にと一番
よ盃の盃へくみ申し其後とも又次の盃へくみ申し帰陣の時ハ必す更にとする也

一 たゝかひに成ける時陣の祝儀の作法の第一は床机に腰をかけて鹿の皮の毛皮しやうぎにかけて白毛を下へなして座すべし白毛のとらや也(一ちく中門へ出る)中門にて大刀をぬき矢をもなすに出陣の時は北にむかひて此の四方をふり南へも東へも出初ていて出る門の前の乗馬の上にて例式に出時はたの見渡をとるへなして持に立廻て人々が押時は弓杖をつきて法を左へ成て可申又馬て申時は人の右へ弓のうしとも出て捧になして可申に其内にても貴人には法をうちへなして外様と外へなして可申也

一 可祝候の事一人ありてすへし初献はえびしかえびと二箸入て二献めはえびて一度入てたゞ両方りてへえて又えびえびえびと二箸入し三献めはえびえびて三箸入に望九箸に置と人々の前に出ぬこいえひてやがて肴を分えて持へし献はとろはさと置て浅くえびて出へし如何る時も三箇外すりそめ出もうしろへ左右万歳也えびと入は酒と幸なる入し是は禄ふみの尾の心にえびし合は酒とお肴く四つ毛は馬の尾の心に陰陽の儀也

一 大将首拙御目事

公方様の御敵なりとも対陣の人の大将の頸を御目に懸る時はうしおの出合に立べし首を取て御目に頸をは板の上に置板は檜木の板の厚さ四寸八寸四方六寸より九寸ばかりとすへし足はさん足に付足の高さ一寸斗頸をつる時は大指にて耳を拘へ一指の内より二て髪を持御前にて左のひざを立居て頸を板にすへなしてら地に置て拘ところりと右の手にて取てひつさげてたの手と頸の切口にあてゝ公方様の御前へ出し見せて頸のおもての方を御目にみえさせて拙御前なれば左の手にて髪を持て右へ向けてつゞ法師頸ならば耳に手を当て左の手にて頸の切口へ四の指を入て左の大指にて髪を抱て左右上て御目にみえさせて左へ向けて立てみせる事なれども御前にて頸を兎角扱事無御座て前に置てみなく髪をすくて御前へ持て参て其後懐中に持て其後御目にて左へ向けて立し頸とは酒むきには御目にかけぬ事也右の儀は御覧やうにて懸御目也

一 去ル嘉吉元年 九月ナリ 赤松大膳大夫満祐法師頼ハ 慶雲院殿御所御実検の時
(伊勢守貞国従四位侍従政所職御所奉行也)伊勢守殿宿所ニ而御実検ありし時南方侍所ニ(佐々木京極也)(法名徳元 初而左エ門)多賀出雲入道 正代(多賀豊後守高忠智也江北記ニ見タリ)
職相抱時出雲入道手を延処生ニ令指南一慰ニ候間ニ也其時の御目候ヘハ其の
実検ニて見させ候しけしてとゝめらると承て以前ニ見ゆる手ゆへ草ニまて持御
前ヘ参て頼とを御中ニ持右の方と左の方とを御目 左ハ見ゆて見えし頼とを見
ゆる時より生ておゆるむ左の方と御覧せさせ候ことく其の上ニすちかへて出ると

大将首見様之事

一 頼とを御覧候人も見ゆるまじきこしと申ゆけ候御覧し候時ハ別御座候なり

侍大将以下首御目事

一 頼とを見せ申ときの次第 右方を通さし居なり頼とを持て出る者何にしてもハ
中さす候申次ハ別人也 位次第ニ人せ申なり
一 軍陣ニて頼を御目候時ハ通りぬりときて御覧候としてよろひきる時ハ已然ニて
とりて太刀をして矢抜ニて可御目事ニ候 然ニて御目候時ハ真弓ニ持なり

きて太刀ばかりさいて御目候也
一 頼とを合戦場ニて御目候時も通りぬりときさきの如し 常ニ而ハ法躰ニて
も御目候 合戦の庭ニて僧ニ御目候時ハ頼を面を見の御法ニ及ばず右の手ニ
てもとをりとさげて頼の切口をあかるき方で袖ニて頼を包みてあてゝ左の手ニて
切口を抱て御目候て左へまわりて立べし
一 入道頼をハ左の手ニて持て大面ひきて左の耳を抱てのこりの手ニて切口
をおさて御目候
一 頼とを御目候前ニするひかりしてする故ニて頼へまたげて御目する
日記ニ出候てハ 土ニてよするこし是ハまじなひ事也

首痛 請取 済事

一 頼痛 請取済事痛の義を何而て何にしが頼しいひてなかなか義として
てよろけて請る者とたれにて右の手をおさへてうしろへ前へして
済し 請取人も左の手をと取右の手とさへて請取ておさむべし

但頭痛之圖并はづち頭巾差様ゟ事ハ出陣の書をみてしるへし

陣中状請取渡事

一 別ニ子細なし 陣中にてハ状と云て気遣する者也 然ハ細々条ニ及へし

同太刀目録請取渡事

一 陣中太刀の義 陣中にてハ仕出て取扱ふ事と云也 常ニハ横之仕て請取渡有

一 太刀目録と称てよそへ行て人々ゟ物と云て時々手づかへつる事と云て渡ニ太刀目録と書てあり 又使ニ祝儀なとにて遣てハ先太刀目録を申して取て扱ふ事と云也 先太刀目録と出家時ハ参るゟ太刀目録を先うけとりて子細を見て書渡ニ太刀目録と請取之 子細を受とりて それに太刀目録とうけとる所の事也 但如此なれとも陣中にてハ使する事といふなり 何事も取扱ふへし

軍中馬請取渡事

一 馬を請取時に引手の先へさし寄て轡の右の方付ゟ左の手綱の内ゟとさし出して一寄手つれ又左人取れて渡也 三度ゟ寄て馬を引手を我のひより請取へし

同馬鎧切同事 二品

一 先のあく門て出て出する事ニ出て先さつくさすして馬を前へむけ西を以肩に
かけて掛前へ門出を取よして門出し馬の右をこし申又門出仕よしてある
しかとこしたる掛のあく 又南をこし申し先さつくさす事ハ後をこし申事を云
掛手ニ門かけて祝儀の先へ申しつるし 又南を左ハうり鎧切肩て後し右とハ切肩ニ
うけぬ事也 又鎧ニハ弓矢をさくる事ても両手鎧切同なるく仕様も秘
伝なり

一 軍陣ニてハ後とハ不定御同三方と切目ニ鎧着時も門後ハ四方鎧切目と肩事
ニて後へ方を残すし其外ハ先條ニ同し又西一方斗も一鎧切同軍陣ニあり
祝ニ多様ニ三方とも一方とも鎧切同し殊ありし切目ニ鎧事仕ハ門出て候

日本政府圖書

一 野川渕数多有しに其さのみ泥しあらハすなはち所
陣中にて馬とらんせぬやうにさせてとぬこと又道を見せぬこと此外ハ右のごとく
それよりなる也

一 出陣にハ馬の口をひかずして宗とくする也

一 軍陣へ馬むかへするにハ先達とハ鞍覆をして志ろきをなきまでかけ出し
向毛の方を前脇へなして是に下し前脇の右の方のたかごくまをする之度
をかす法なり右方を刀鞘まもいりする也

圖書局文庫

以上拾二箇條

弘化五年戊申正月十日再寫　飯島與作勝休（花押）

国立公文書館
National Archives of Japan